

2017年度国際版画美術館事業報告書【展覧会版】

展覧会名	「横尾忠則 HANGA JUNGLE」展			担当者名	学芸係 滝沢恭司・町村悠香				
会期	2017年4月22日(土)～6月18日(日)			開催日数	50日間				
協賛・後援・協力	共催:東京新聞								
巡回館	横尾忠則現代美術館〔神戸市〕								
展覧会概要	1960年代から縦横無尽に創作活動を続けるアーティスト・横尾忠則(1936年生まれ)のプリント作品群を「HANGA」と称し、また多種多様なスタイルと内容の横尾の「HANGA」を「JUNGLE」のイメージに重ね合わせることで、これらの単語をキーワードとして展覧会を開催した。2016年度に横尾氏から寄贈された129点の版画とすでに収蔵している横尾版画を含んで、横尾忠則の全版画に近い作品と1960年代のポスターを合わせて約250点を出品し、「HANGA」による大回顧展として開催した。著名人出演のイベントを連続開催して、展覧会を総合的に盛り上げた。								
ねらい・対象	「HANGA」によって、横尾忠則の創作活動の全貌を探り、その社会性、美術表現や未来の現代版画のあり方への再考をうながすことを目指して開催した。50歳代後半から80歳前後の横尾をよく知る世代のほか、10代から30代の若い世代を来館者として狙った。								
関連催事		開催日	タイトル	講師等	参加者数				
	講演会	4月23日(日)	横尾忠則と大版画世界	美術批評家 榎木野衣氏	70人				
	鼎談	4月30日(日)	出張アトリエ会議「お喋り」から聴こえる創作の秘密	横尾忠則氏、小説家・保坂和志氏、小説家・磯崎憲一郎氏	137人				
	対談	5月14日(日)	横尾忠則・大和悠河 対談	横尾忠則氏、女優・歌手・大和悠河氏	136人				
	対談	5月25日(木)	横尾忠則・蜷川実花 対談	横尾忠則氏、写真家・映画監督・蜷川実花氏	151人				
	サイン会	6月18日(日)	特別企画『横尾忠則 HANGA JUNGLE』サイン会	横尾忠則氏	300人				
	館長スペシャルトーク	6月10日(土)	館長スペシャルトーク	当館館長 村田哲朗	45人				
	ギャラリートーク	4月29日(土)、5月13日(土)、5月20日(土)、5月27日(土)	ギャラリートーク	当館学芸員 滝沢恭司、町村悠香	計 153人				
観覧料	一般	65歳以上	大・高生						
	800円	400円	400円						
観覧者数	有料計	無料計	総観覧者数	内、一般	内、65歳以上	内、大・高生	内、小・中生	内、その他	
	16,354人	3,508人	19,862人	14,334人	3,676人	1,346人	506人	-人	
	目標値	11,820人							
主な収入	観覧料収入		図録販売収入		受託販売収入		その他の特定財源		
	10,222千円		1,884千円		1,792千円		-千円		
事業経費	<b>【展覧会開催経費】</b> ・講師謝礼(手話通訳含む) 102千円 ・協力謝礼 180千円 ・消耗品費(図録購入費) 2,722千円 ・ディスプレイ作成等業務委託料 806千円 ・ポスター、チラシ、観覧券、案内状作成委託料 2,172千円 ・写真撮影委託料 64千円 ・広告宣伝委託料(多言語化対応特設HP開設) 1,238千円 ・巡回展負担金 7,500千円							14,784千円	
主な広報・取材等の講評	・会場に立つて、わたしは文字通り「ヨコオ・ワールド」を堪能した。(酒井忠康『東京新聞』5月24日) ・「横尾ワールド」に伝統から解放された英字表記はよく似合う。(『毎日新聞』6月12日夕) ・横尾忠則という特異な才能を備えた身体がHANGA製造装置であることに気づく展覧会。(大西若人『朝日新聞』5月23日) ・ほかインターネット上に展覧会情報が多数アップされた。								
アンケート結果	回収数	回収率	市民率	リピーター率	満足度(とても良かったと良かったの率)				
	713件	3.6%	21%	45%	企画の内容	展示作品	展示の仕方等	95.5%	94.8%
	主なご意見		別紙のとおり。						

反省点と改善方法	予備調査	約1年前に初めて横尾忠則氏と展覧会の打合せを実施し、2016年秋以降は、10回以上横尾氏のアトリエを訪れ、打合せ、作品調査などを行った。横尾忠則現代美術館や図書館などで作品調査、文献調査を行い、東京新聞、横尾忠則現代美術館との打合せを適宜行った。
	作品選択	当館所蔵の作品約150点を含み、横尾忠則の全版画を出品することを目指した。少数の借用できなかった版画と所在不明の版画を除き、ほとんどの横尾版画を出品した。新作6点も出品した。
	図録作成	横尾忠則氏との本展覧会の打合せで、本人から一般書籍として全版画集を制作・発行し、それを展覧会図録としたいという希望が伝えられた。また出版社として国書刊行会を希望される旨の話があった。それを受けて、国書刊行会を訪ねて制作・発行の意志を確認したところ、承諾されたので、以後は横尾氏、展覧会主催者、出版社で協議しつつ編集作業を進めた。当館は、前付けテキスト、章立て、章解説(一部横尾忠則現代美術館)、作品解説(同前)、年譜作成、文献目録の執筆・作成という、本の内容の多くの部分を担った。販売単価を3000円程度に抑えるよう依頼し、結果としてA4判変形サイズ、260頁、2800円税別の書籍となったが、資料的に充実した内容になったと考える。横尾忠則氏のアートディレクションにも力が入り、内容的、ボリューム的、デザインの割安感のある書籍・展覧会公式図録として仕上がったと考える。国際版画美術館は最初1000部購入し、うち600部を完売、追加で500部を受託販売、さらに追加で500部を受託販売して全て売り切った。最終日の横尾氏によるサイン会は驚異的に人気で、1日で300部ほどの販売となった。
	ディスプレイ	当初は出品作品を選ぶつもりであったが、横尾忠則氏の希望を受けて全版画を出品することになってから、展示のイメージを一新し、展覧会タイトルにある「JUNGLE」のように、壁面に多種多様な作品が所狭しと並ぶ展示空間をつくることへと発想を変えた。そのような発想をベースとした展示によって、これまでの国際版画美術館の展示にはない、横尾氏の総天然色の作品による斬新な展示空間をつくることができた。また、エントランスホールの大谷石の壁面(入口奥突当り、2Fロビー手すり下壁面)を大きなバナーで飾り、さらに1Fから2Fまでの階段を展覧会タイトルの帯シールで飾って、入口から展覧会場までを横尾ワールドとしてイメージ構成した。
	広報	展覧会の1ヶ月半ほど前に、プレスリリースを発送した。共催の東京新聞が外部の識者による記事を数回掲載したほか、朝日新聞、日本経済新聞、毎日新聞、読売新聞が展覧会レビュー記事を掲載してくれた。また、NHK『日曜美術館 アートシーン』のメインコーナーで取り上げられた。美術雑誌や文芸誌、情報誌など多くの雑誌も取り上げた。横尾忠則氏本人が何度もブログに書き込んでくれたことと、来館者が展覧会場場で撮影した写真をSNSやブログにあげてくれたことが大きな宣伝効果となった。横尾氏デザインのポスター、ちらしもインパクトの強い目立つもので、集客に反映されていたように思われる。美術館公式サイトには、横尾忠則展に関する英語表記の頁をアップし、外国人の来館を導くことができた。多角的に周知できたことが入場者数に反映されたと考える。
	イベント	横尾忠則氏と相談して、芥川賞作家や元宝塚歌劇団のトップスター、エンターテインメント界で人気の写真家兼映画監督など、著名人が出演するイベントを連続的に開催した。事前募集の手続き、謝礼支払い、スケジュール調整、移動、演出、事前打合せ、会場作りなどでさまざまな調整が次々に生じつつ労力もかかったが、学芸係を中心に職員の協力体制によって全て無事終了させることができた。そのことは今後の美術館活動のあり方を見直すうえでよい機会となり、また美術館の多角的な活動をアピールする上で、成果があったと考える。
	作品輸送	出品作品の大部分は神戸の横尾忠則現代美術館から輸送した。予定通り進み、問題はなかった。当館所蔵の約150点を含む作品を9月1日に巡回先の横尾忠則現代美術館へトラック2台で輸送。その後、横美での展覧会が終了する12月末以降の返却作業が予定されている。
	展示撤去	展示は4月17日(月)から20日(木)までの4日間で行った。事前につくった展示プランにもとづき、しかし現場で大きく修正を加えつつ作業を進行させ、無事終了した。2段掛けや特大作品の展示、不規則な並びの設置などが多くあり、またそれに応じて照明も煩雑だったが、担当者としては満足のいく展示になった。撤去作業も手際よく進み、巡回用に梱包して収蔵庫に保管した。
その他特記事項	出品作品の中に性表現を含む作品があり、それらを展覧会場内にある普段休憩室として利用しているスペースにまとめて展示した。それに際し、町田サポーターズの力を借り、案内人となってもらった。このような体制をしいたためか、展示内容についてのクレームはなかった。 また、全面的に写真撮影を許可したが、全体としては好評だったと思うが、シャッター音がうるさい、気が散って作品の鑑賞の妨げになるなどの強いクレームが寄せられた。撮影の方法や撮影箇所の限定など、今後の工夫が必要である。	

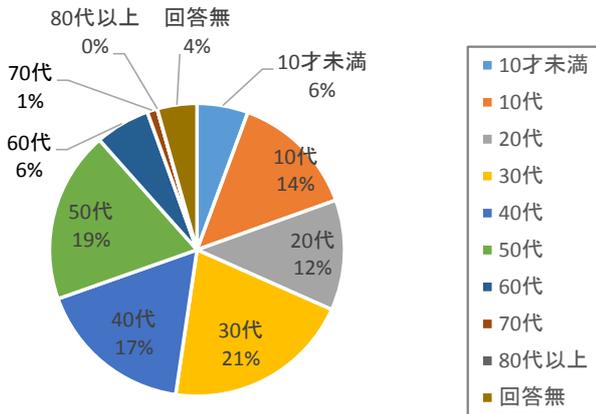
# 「横尾忠則 HANGA JUNGLE」展

## アンケート集計結果

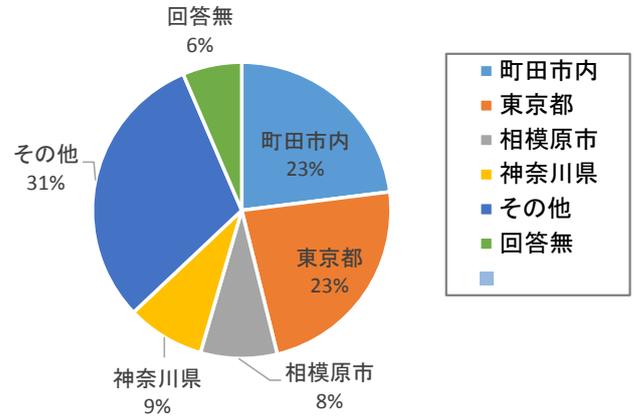
開催期間：2017年4月22日（土）～6月28日（日）

回答者数： 713 人（総入館者数：19,862人 アンケート回収率： 3.6%）

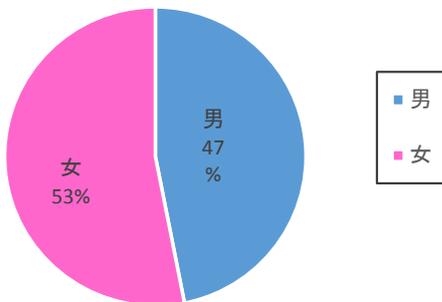
### ① 年齢層



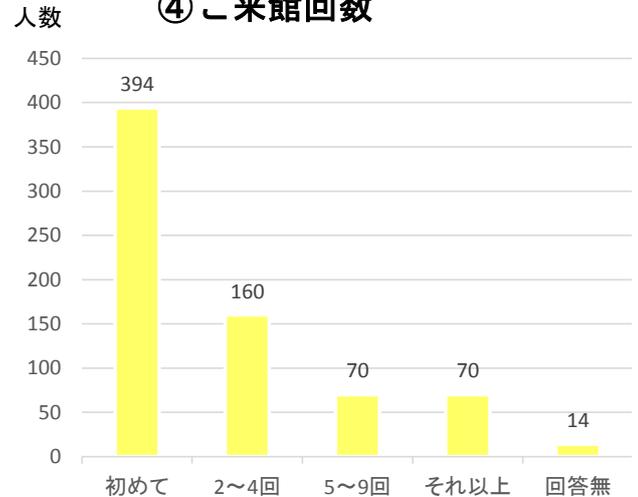
### ② お住まい



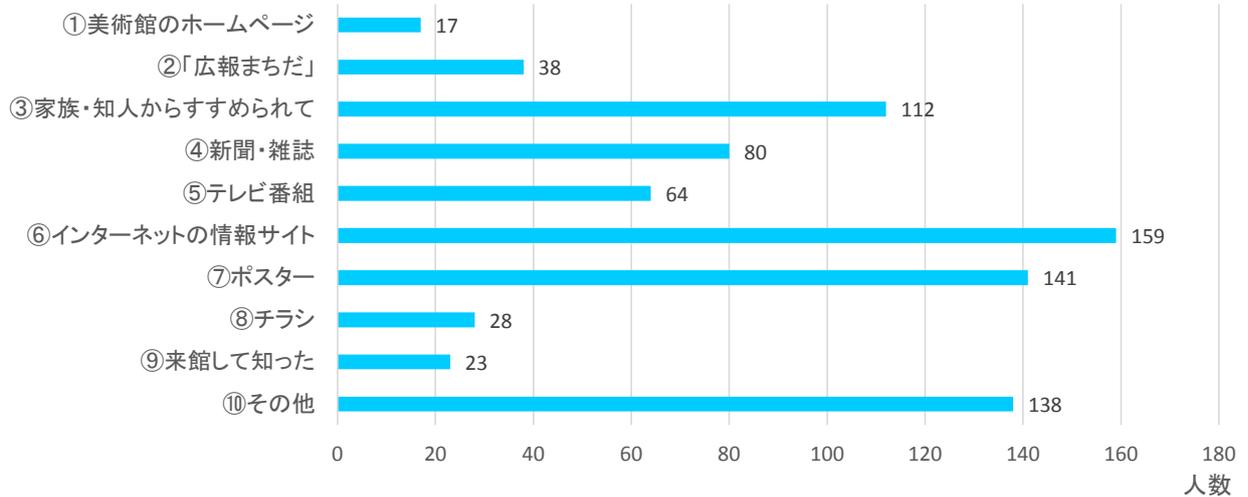
### ③ 性別



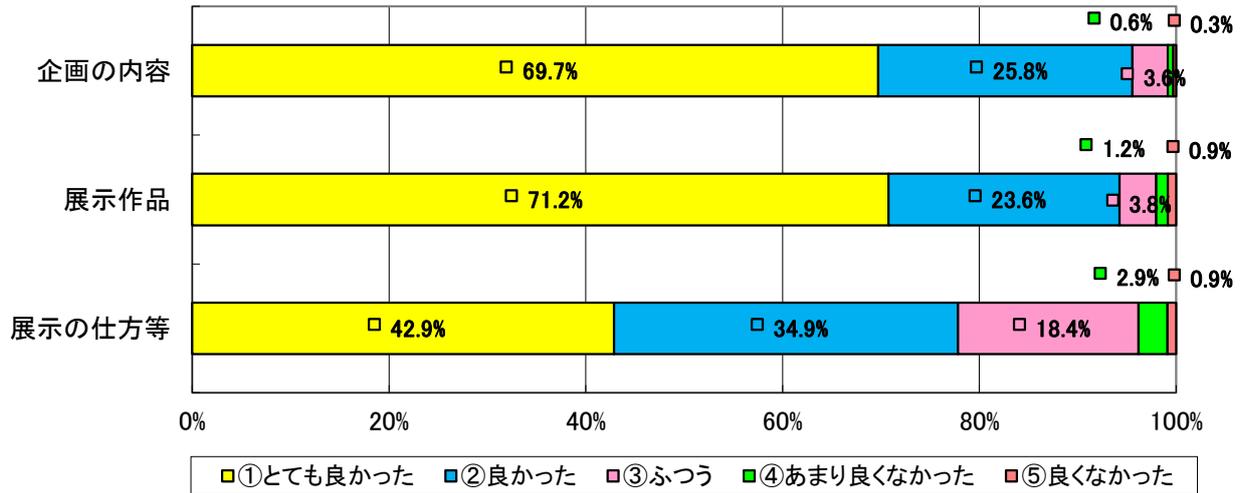
### ④ ご来館回数



### ⑤ 展覧会情報の入手



## ⑥ 回答者の満足度



## ⑦ 主なご意見・感想

- ◆思った以上にたいへん素晴らしい内容だった。◆作品をゆっくり鑑賞できてよかった。◆多くの作品が展示されていてよかった。◆パワフルな展示にしばれた。◆見ごたえがあった。◆いつもよい企画を実施していただきありがたい。◆今回の企画のように現代作家が見たい。郊外の地味な美術館からオンリーワンの美術館へ。◆40年近く住んでいて公園にはよく来るのに館内に入ったのは初めて、これからは見るようにしたい。◆無料公開はたいへんありがたい。協賛箱を用意してはどうか。◆町田にこんなに意欲的な美術館があるとは知らなかった。◆とても満足した。◆はじめて来館したが、版画が面白いものだと感じた。◆とてもよかった。今後も刺激の強い企画を期待している。◆ひっそりとした森のなかにある美術館、というのがとりえだと思う。◆緑の多い環境がよく、また来たい。◆版画に特化した美術館として今後もユニークな展覧会を開催してほしい。◆ギャラリートークが丁寧な解説でよかった。◆写真撮影OKなのがよかった。
- ◆写真撮影のシャッター音がたいへんうるさい。これが今の展覧会のあり方なら、もう来ない。◆写真撮影厳禁にしてほしい。◆R指定の作品が芸術として展示されているのがよい。◆「性風景」の展示が淫びだった。

横尾忠則という著名なアーティストの展覧会ということで、想像以上に反響があり、来場者目標を大幅に上回ることができた。その要因はさまざまあると考えるが、そのひとつは、当館を中心とする主催者が頻りに横尾忠則氏とともに打合せを重ね、本展覧会開催へ向けて結束したことで、見ごたえのある展示内容になったことがある。その点は企画の内容、展示作品、展示の仕方等の項目でそれぞれ満足度が高いという、アンケート集計に現れている。展示内容を絶賛する回答も多数あった。一方、東京近郊では近年なかった横尾忠則の大規模な回顧展を開催するというタイミングのよさもあったと考える。版画の展覧会とはいえ、1960年代からの横尾の仕事の軌跡を見ることができる内容は、充分期待に応えるものだったようだ。また、横尾忠則氏や来館者が積極的にSNSで情報を流してくれたことは、直接的に来館者増につながったと思われる。その点も、アンケート集計の展覧会情報の入手方法で、インターネットの情報サイトによるものがもっとも多かったことに反映されている。ポスターを見ての来館者も多く、通常よりも経費はかかったとはいえ、横尾デザインのアピール力のあるポスターが功を奏するかたちとなった。著名人参加のイベントを連続的に開催したことも展覧会情報の発信力の強さになったと考える。準備にはかなり労力を要したが、数値的にそして美術館のイメージアップなどの点でも良い結果を得たと考える。

来館者の年齢層として、10代から50代までの層が平均的な数字を示したことや、都内23区や遠方からの来館者が多かったこと、初めての来館者が多かったことは、今回の展覧会の特徴である。

展覧会会場での写真撮影を全面的に許可したところ、多くの人が写真撮影を楽しんでいたが、その一方で、シャッター音がうるさいとか、撮影ばかりしている人がいて気になって鑑賞に集中できないといった、強いクレームもあり、今後の写真撮影のあり方について課題が浮き上がった。

性表現をとまなう作品の展示に際して、個別のコーナー展示を行い、さらに町田サポーターズの協力を仰いで案内人になっていただくという体制を布いた。今回は特別の意見もなく、全く問題は生じなかった。今後類似作品を展示する際の参照としたい。